

筑前國續風土記 卷之二十四目錄

古城古戰場 一

那珂郡 古城十個所
古戰場一個所

博多古壘

龍神山城址

一の嶽古城

天浦城址

古野古城

老林古城

鶩ヶ嶽古城

貓嶺城址

虎ヶ岳城址

城腰城址

諸岡原

席田郡 古城一個所

稻居塚古城

御笠郡

竈門山古城 內山太宰少貳城址 升形城址

米山古城

大野城址

岩屋古城

高尾山

城山城址

蘆城村古城

唐山古城

不動城址

天判山古城

飯盛古城

柴田古城

米かみの址

二日市合戰場

博多見址

和久堂址

龍ヶ城址

筑前國續風土記 卷之二十四

貝原篤信選定

貝原好古編錄

竹田直定校正

古城古戰場 一

那珂郡

○博多古壘

古より此地は唐船來着の要津なれば、民家多く、繁榮の地にて、殊に異賊襲來の防禦の爲に、屯營を多く置れたる所なれば、四方に要害を備へたり。北一面は皆石壁也。是は上古より有し石壁にて、弘安の時修補せし也。此故に博多を名付て、石城府と云。妙樂寺を石城山と號せしも、彼寺昔は海濱に在て、前に石壁有し故とかや。東は袖の湊の入海迫りて、西の方那珂郡に通れり。此地昔は警固の官人ありて、其館もありしかど、今何れの處と知れがたし。南の方矢

倉門と稱する邊は、中古太宰少貳の宅地にて、當時
樓門ありし故に、今も其處を矢倉門と稱すと云へり。
西は又今の大湊橋より丸町の裏に通りて隍あり。今も
片原町の内に残りて櫛田の社の後に通れり。又其南
の郭外には、深き隍有て東西に通りしを、房州堀とい
ふ。近古大伴の一族臼杵安房守鎮賡といふ人、博多に
砦を構へし時ほりしといふ。今はあせて田となりぬ
れども、其跡猶いちじるし。其時に築ける土堤も今
猶残れり。昔宋朝の末に、蒙古の國王北狄より起り、
世を経て後、終に中華を攻したがへて、國號を大元と
改む。是を元の世祖皇帝とす。我朝龜山院文永八年
にあたれり。世祖位に即^{つき}し初より、度々日本に書翰を
渡し、貢物を捧ぐべきよし告來りしか共、我國より
は返翰にさへ及ばざりしかば、元の世祖甚怒りて、兵
船を催し、忻都と云者を大將として、本朝文永十一
年十一月對馬島に攻來る。筑紫の武士等壹岐にて防
戦ふ。此時博多にても防戦あり。蒙古の軍法亂れて

調らず。其上箭たね盡ければ、筑紫の海邊處々濫妨して歸りぬ。其後杜世忠と云者を使ひとして、日本に渡す。我國又返答に及ばず、杜世忠をとらへて是を殺す。是よりして蒙古の軍兵、又攻來る事もや有らむとて、其備をなさしめらる。扱博多の海邊より東は箱崎、多々良潟、西は鳥飼の海邊、姪の濱、生の松原、今津に至るまで石壘を築て、海面は急に一丈より高く、此方はのべにして、馬に乗ながら馳登り、

賊船を見おろしてさげ矢に射るやうに拵えたり。此石壘修理の事など、鎌倉より催促せし文書、當國所々に今に残れり。長政公入國の初迄は博多、箱崎、福岡の海邊に、石壘猶所々殘て有しに、慶長六年福岡城の石壘を築く爲に取用て、今は無し。如斯昔は博多の海邊に石垣有しかば、海東諸國記に博多を石城府と云よし記せるも、此故成べし。斯て本朝の弘安四年正月元世祖皇帝日本を攻んとて、阿刺罕范文虎洪茶丘李庭張拔都等を將として、士卒凡十萬人を渡す。

其折節高麗王暎も中華に參勤せしが、高麗國の兵を中華に加勢して、日本を討んとこひて、兵を副て日本に渡す。中華高麗の軍兵都合十餘萬人、數千艘の舟に乗來る。高麗王加勢の事、元史及通鑑續編に見えたり。 阿刺罕は路次にて病死す。范文虎等が軍評判まちくにして一決しがたき故、漸七月に蒙古の兵船并高麗の加勢皆日本の地に着き、志賀島殘島まで寄來る。日本の軍勢共、待かけて合戦する所に、閏七月一日元史には八月一日とす。和漢の暦閏月の不同なるべし。 大風吹て、蒙古の船多く破損し、士卒多くおぼれ死す。同月五日、范文虎等の諸大將は、纔に残りし堅固なる船七八艘に取乗て逃歸る。其餘の軍勢は鷹島

元史には、五龍山とかけり。すなはち立界島なり。八幡愚童記には五龍山をのせす。鷹島とかけり。俗説に百合若大臣立界が島に居られし時、みどり丸といふ鷹をかはれしが、後にはみどり丸を神に祝ひて、立界島の産靈として小鷹明神と號す。此故に立界島を八幡愚童記に鷹島と號せしにや。又肥前の松の下に漂ひ、或は大波に打上られて居たりしが、其内破船を繕ひて、蒙古高麗人共多く逃去ぬ。殘る者共は、糧さへ盡て飲食せざる事、三日に及ぬ。されば諸人相談し、張百戸

と云者を殘兵の將として、彼が下知を聞く。さて木を切り舟を作りて歸らんとする所に、同七日に筑前の兵、太宰少貳三郎左衛門景資を大將として、兵船數百艘に取乗て、鷹島に押寄て攻ければ、蒙古高麗人戦負て討るゝ者多し。打残されし二萬人をば、日本の兵是を生捕て、同九日博多の那珂川の邊にて、悉く切殺す。右の軍の事元史の日本傳并元文類、通鑑續編、八幡愚童記等に見えたり。太平記等に記せしは、此等の説に大に背けり。八幡愚童記に曰、弘安異賊攻來し時、七月晦日夜半より乾風大に吹て、閏七月朔日賊船悉く漂泊して沈む。大將は逃去、相殘舟共波におぼれ磯に上りて、算を亂せるがごとし。死人共寄重りて、築地をつくに相似たり。鷹島に打上らるゝ初の異賊共數千人舟なくして疲居たりしが、破舟をとちくさりて、七八艘に取乗て押出す處に、少貳三郎左衛門景資等舟にて押寄たり。賊共今は叶はずとて、身命を捨て防戦ふ。相殘る賊千餘人降を乞ける。博名那珂川のほとりにて首を切れる。

其内于闐、莫青、吳萬五と云る三人をゆるして、此趣を語れとて本國に歸らしむ。此時高麗の兵も、元朝の兵の加勢に來りしかば、今に至るまで世俗に蒙古、高勾麗モウコウリとて、恐しき事に語り侍るは、此時の事をいふなり。蒙古をむくりとよむは、もうこと通す。ちは下のこくりに對せり。高勾麗は則高麗の事なり。高勾麗をこく

りとよむは、音の相通也。蒙古・高勾麗をもくり、
こくりとよむは、康富やすともの記に見えた。是を考へず
して、蒙古國裏まぐりこくりと書く人あり。誤也。其時殺せし高
麗人の屍を、怡土郡高祖村の近きあたりに埋め、其
爲に寺を建つ。高麗寺かうらいじ是也。今寺はなくして、其址
のみ残れり。高麗寺有し所なる故、村の名とす。今
も高麗寺村あり。又高麗寺の近村三雲村にも、其時高麗人の首を埋して大塚あり。蒙古此
軍に負て、十萬の兵皆死したりし故にや、重て日本
を攻す。賊兵來る事なし。されば五雜俎スルと云る明朝
の書に云く、元之盛時、外夷朝貢スル者千餘國、可レ謂
窮ノ天極ノ地罔ヲ不賓服ヲ而惟日本崛強ニン不臣タラ、阿刺罕
等率イテ師十萬ヲ往征スル、得コラ返者三人耳。是を以て見れば、
元の時諸夷皆元朝に隨ひしかど、唯日本のみ唐土に
臣とならず、此後博多津の警固要害の營作怠らす。
此時博多警衛催促の文書、國中所々にあり。一書に
云。

筑前國役所博多前濱石築地破損之事、今年正月

廿五日、御教書案如レ此、早任_下被_ニ仰下_一候旨_上向_ニ
役所_ニ云_ニ破損_ニ加作_ニ可_レ被_レ終_ニ其功_ニ候。仍執
達如_レ件。

正和五年二月十二日

少貳筑後守妙惠貞經在判

神定禪地頭殿

是花園院の御時、鎌倉將軍御教書の旨を以て、博多
前濱石築地修補をなすべき由下知の狀也。其後天下
亂國となり、九州には殊に合戦止む時無りしかば、
博多も回祿に及びしとかや。天文十七年にも、博多
炎上しぬ。永祿十二年五月十三日、此所にて大友宗
麟の勢と毛利元就の兵と合戦ありしが、大友はもと
より博多に在陣す。中國方の軍勢は立花山を下り、
箱崎松原に備を立、足輕をかけて津内を放火せしと
なむ。かく度々に焦土と成しかば、民人各安住せず。
民のかまども數へりて、其後は有か無かの如く成り
しとかや。

○龍神山城址（たつがみ）

安徳、山田、梶原、三村の堺に在り。安徳天皇岩門に御滞留の時、警固せし武士の居たりし城と云。

○一の嶽古城

一ノ瀬村に一の嶽といふ古城あり。本丸の址方三段許高さ十町餘山上に在り。是に昔九州の探題千葉氏の居城成しとかや。近世は筑紫上野介廣門が出城成しと云。秀吉公未だ九州を征伐し給はざる前は、當國の内も島津方、大友方とて二に分れ、互に戦争止む時なし。中にも岩屋、秋月、筑紫、鼎の如くそばだち、各出城向城をかまへ、度々所々にて合戦に及ぶ。然れ共筑紫家は立花と由緒有ければ和睦を調へ、高橋紹運の子、彌七郎統增（ひねます）を筑紫が聟とすべきとの約諾にて、天正十四年卯月岩屋へ輿入婚禮あり。秋月此由を聞、然らば以後は種眞が身に於て難儀出來べしとて、薩摩へ使を立て、筑紫高橋を亡すべき由申入ける。依之、島津圖書頭、伊集院右衛門大夫兩將に

て出陣し、天正十四年七月八日、廣門が館へ取かけ攻敗る。又勝尾の南、高取の城をも攻落し、廣門を勝尾の城に追上げ、難儀に及びし所に、廣門が詫言により下城を免し、親族悉く園邊と云所に引下し、其後筑後三猪の大善寺に押籠め、番を付置たり。扱又同月十四日、薩摩の士高城宮内左衛門、松木治部丞、秋月家人上野伊賀守、一千餘人の勢を率して、那珂郡岩門の郷に發向す。是は筑紫廣門が家人園部そのべたからべ財部の者共、寶満の城には籠らず。山田河内守を將として五百餘人龜尾の城下に大石を疊み、上には大木を横たへ、城戸を構へて一の嶽の城に立籠る。依之、薩摩の者、寶満落城せざる内に是を攻落し、後を心安して、立花の地に取懸らんが爲也。高城松木は攻手にて、上野伊賀守は案内者とぞ聞えし。押行道筋にも、牛頭など云所に、筑紫が端城ありと云共、早明けのきたれば、何の妨もなく、不入道村猫嶺と云所まで押寄て、四箇煙を悉く放火し、次第々々に攻近づ

く。城内の兵共は、勢の程を見せじと、龜の尾の木蔭に隠れ居て、所々より遠鐵砲を打かけて時を移す。高城松木是を見て、敵は聞しよりも小勢なりと見ゆるぞ。かさに廻り、一あてあてゝ見よとて、馬手の谷間より山陰を廻り、敵の弓手より横谷に懸て閑をどつと作りければ、龜の尾嶺を堅めたる筑紫が家人等、敵のかさより廻るを見て、後を包まれては叶はじとや思ひけむ、皆本城指してぞ引上りける。かりければ、薩摩の軍勢は龜の尾に向陣を取けれ共。一の岳は山高く、石峻しくて、容易く攻上る事なりがたければ、如何せんと山を見上たる許にて、日既に暮ける。其夜半ばかりに、筑紫勢とても叶ふまじとや思ひけん。肥前を指して落行けり。一の岳の城には、秋月氏の家人共を置いて守らせける。かくて廣門は囚となり、筑後の太善寺に居たりしが、生虜となり、薩摩に行む事無念也。是より逃て、一の岳の城に、秋月の者共籠居るを攻取り、來春秀吉公の御下を

待ち世に出むと思ひ、ひそかに人數を集めけるに、雜兵共に七八百人も有しかば、薩摩の者共宿直しける所を、不意に取かけ追散し、其後一の岳に押寄せ、秋月の兵共を攻崩し、城番の將兩人を初め悉く討収、異儀なく打入、則一の岳に在城し、在々より兵糧を取寄せ、再勝尾の城に還住しける。秀吉公より黒田孝高に給る御書に、筑紫居城取返候由申越候、尤の仕合に候と有は、此事成べし。一の岳の下、五ヶ山に入る谷間の上に、平なる小山あり。御所原山と云。是一の岳の城主の宅有し所なるべし。此一ノ瀬村に頭風山南林寺と云禪寺の址あり。今は民宅となり、其後の高き所に、探題千葉氏の墓あり。大杉を印とす。又龜の尾城の址あり。是は大友家い旗下麻生民部少輔が居城なりしと云。

○天浦城址

下白水村に在り。昔島鎮慶と云る者の居城成しどかや。當郡一の瀬村の上、一の岳の端城なりと云。堀

の跡あり。

○古野古城

三宅村の後の山より、東の方に長く差出たる尾崎なり。下なる田地よりは、高さ十四五間あり。南北に淺き谷あり。谷より山上まで八九間ながら、屏風を立たるが如し。東の尾崎も亦如レ此。西の尾つゝきの所少々堀切あり。其上は二段餘、碁盤の面のごとし。山上より海上はるぐ見渡し。當郡、御笠郡、糟屋郡など、山々里々一望の内に在て、勝景の地なり。亂世の時、小身の士、要害に用ひし所なりと云。其名をも城が尾と云。百年前には、的野主税入道了心と云者居たりしと云傳ふ。

○老林古城

別所村にあり。龜の尾の出城なりしと云。

○鷲岳古城

南面里村に在り。是昔大友氏の家臣大鶴上總が居城の址なり。上總初めは大友宗麟の小臣なり。宗麟九

州に武威を振はれし時、家中に勇士猛將は有しかども亂世にて僻地なれば、禮法を知れる者なければ、上方に遣はし、和禮を習はせ、家中にも教たく思はれけれ共、亂世なれば人多く上せてあしかりなん。小臣の中より才ある者を一人遣はすべしとて、大鶴九郎と云者を選び出し、都に上せられけるに、此者才覺ある器量成しかば、都に上り三年逗留し、伊勢氏に逢て和禮を學び、其外猿樂の事、刀劍の目利^{めき}まで習ひ得て歸りける。宗麟不斜悅び、其恩賞として筑前那珂郡の内にて、岩戸、河内、三百町充行、九郎を改て上總と號す。其後岩戸へ入部し、一城を構へんとて其地形を選びけるに、此山は高山にて要害能しとて頓て城を取り立、鷺ヶ岳と號す。上總後に髮をそりて宗雲と號す。宗雲の事、猶早良郡に記す。其比此邊大友方には、早良郡荒原城に小田部紹叱^し、那珂郡には此鷺ヶ岳の大鶴あり。天正七年十月廿四日、龍造寺隆信、其身は肥前に在ながら、筑前に兵を遣はす。先、那珂郡には

大田兵衛を將として三千餘人、肥前神崎郡坂本より筑前五ヶ山の奥大野の里へ打越、鷺ヶ岳の城を攻んとて南西里へ陣を取りける。斯て筑紫右馬之助廣門も、大田と一手になり、鷺ヶ岳の城を攻けるが、此由を御笠郡岩屋の城主高橋紹連聞傳へ、大鶴を救はむ爲に鷺ヶ岳の後詰し、山田山に陣取て隆信勢と對陣す。大田筑紫兼ては鷺ヶ岳の城を攻るとも、何人有てか後詰すべきかと心安思ひし處に、紹連かく後より寄来ければ、案に相違して、いやしく岩戸の長陣無益なりとて、大田は肥前に引入ける。然共筑紫廣門は引とらず、十一月十五日まで足輕を出し、日々夜夜の迫合あり。是は紹連を岩戸につり留置、岩屋の城を秋月種實に乗取せんとの約束なりければ、秋月の士江利内藏助、長谷山民部、内田善兵衛、板並左京等五千餘人にて、岩屋表へ打出る。岩屋の留守居、屋山中務が方よりかくと注進したりければ、紹連岩戸を引取けるに、筑紫勢六千許にて付來り、危かりけ

るを、成富左衛門、土岐大隅、荒川隱岐、萩尾麟可など云勇士等、御笠郡大利の邊にて返し合せ、筑紫勢を半途まで追返しぬ。其隙に紹運は岩屋に引取らる。紹運家人高橋越前、土岐大隅、福田民部城中の屋山が勢と一緒に成て、秋月勢四千許高尾山の麓まで詰寄たるに打向ひ、火を出してこそ戦ひけれ。秋月勢の若干うたれて夜須郡へ引退く。かかる所に戸次道雪は、湯の浦山といふ所に、出陣して居られしが、岩屋表に合戦有と聞て、一騎がけに馳來られけるが、筑紫勢取て返し、紹運の勢と戦ふ所に、道雪水城川原より筑紫勢の後に打出、閻をどつと上ければ、筑紫勢一支もせず、直達すぢあがひに上の古賀長岡を馳通り、肥前養父郡に引入ける。かゝりければ大鶴は虎口の難をのがれ、城を堅く守り居けるが、同九年に筑紫廣門に龍造寺が士高木、大田など云る者相加て、其勢四千五百餘人、此城を攻んとて、さしもけはしき東坂を只一息に登りて隙なく仕寄をつけ、夜晝のさかひ

もなく鐵砲をつるべ放せぬければ、城中こらへずして、廣門方へ城を明渡しける。

○猫嶺城址
不入道村に在り。山田兵部丞と云し者居たりし城なりと云。

○虎ヶ岳城址
五ヶ山の村、綱取村の境内に在り。城主不詳、麻生氏の端城なりと云傳ふ。

○城ノ腰城址

上梶原村に在り。昔の城主詳ならず。

○諸岡原

諸岡村の境内に在り。建武三年三月一日の合戦に、太宰少貳一男能登、同人庶子彦次郎貞廣、此諸岡の戦場に於て討死す。

席田郡

○稻居塚古城

上月隈村に在り。又別所山共云。郡士安河内筑前守

と云者居たりしと云。或は云、立花の端城にて、戸次治郎兵衛と云者籠りしと云。安河内筑前守の遠孫、今は糟屋郡別所村の農人となる。

御笠郡

○竈門山城

此城其始を尋るに、怡土郡高祖の原田泰種が二男何某、初て筑後三原郡高橋に住し、其邊を領す。依て高橋氏と稱す。建武年中、足利尊氏筑紫に下り大軍を起し、都へ攻上られし時、菊池を押へむ爲、仁木義長、一色入道、高橋光種を九州の三檢斷と號して殘し置る。義長は上洛して、後に一色・高橋兩檢斷たり。

光種其領地高橋に城を構へて居たりしが、其子孫相續して在城す。豊後の 大友親世の時に當て、九州の諸將多は大友の幕下に隨ふによつて、兩檢斷職威勢を失ふ。其後一色は絶て、高橋許殘れり。高橋も大友に隨へり。天文の初、高橋三河守長種、筑後國高良山の僧を殺害せしに、其怨靈夜々來りて眼に遮りけるが、程なく病死して、家を繼べき子なし。

一説、西國太平記に曰、光種七代の孫武種、其弟妙印と云山伏と不和の事出來て戰ひ、是を殺す。妙印怨讐となり、武種を取殺し、高橋の家断絶す。其家臣大友に此由を告て、養君を乞しかば、

大友義鑑の計ひにて、其一族一萬田左京大夫親敦が二男右馬助に、長種が遺跡を繼しめ、高橋二河守鑑種と名乗らせ、筑後國高橋の城主とせらる。鑑種後に寶滿の要害よきを知て、初て竈門山の城を築て爰に移る。是此城の濫觴なり。岩屋を以て端城とす。

所領も多くして、凡大友一門の中に、鑑種に超る人無りしに、大友義鑑の子義鎮、麟と云。無道の人なりしが、鑑種が兄一萬田彈正が妻の容貌美なるを見て、是を得む爲罪なき彈正を殺されしかば、鑑種恨を含で、永祿十年春の比より大友に背き、毛利家に心を通じ、此山を根城とし、岩屋^を變岳を端城として兵糧を籠め、六月初より專謀叛の色を顯しける。此よし豊後に聞えければ、討手として戸次丹後守鑑連、臼杵越中守鑑速、吉弘左近大夫鑑理、數萬の勢を率して、七月七日太宰府へ押寄せ、散々に攻戰ひ、臼杵

越中守一手を以て岩屋の城を即日攻落し、頓て三將寶滿の城を取巻けり。此山は九州に類ひ少き高山なる上、城の四方嶮岨にして屏風を立たるが如し。且石を疊みて築上し其上に屏をかけ、矢挾間を繁く切ならべ、矢石鐵砲を打出す事隙なければ、寄手數を盡して討るゝばかりにて、攻べき様も無りけり。

さらば術を廻らし、重て攻べしとて悉く引下り、麓に陣をぞ取りける。鑑種久敷謀叛の志ありける故にや、城の構へ堅固なれば、近々に落べしとは見えざりけれ。其後毛利家より鑑種を救はむとて、兩度まで助勢出しけれ共、旅勢なれば思ふ様に勵成り難くして、永祿十二年十月、毛利家の勢中國へむなしく引て歸りける故、今は助勢の兵もなく、久敷籠城して兵糧盡き、餓死を待ばかりなり。然るに大友の親族一萬田一類は、皆鑑種が伯父従弟なりしかば、此人々を頼て種々詫言し、一向降を乞ひ、一命をのがれんとす。宗麟さらば、一族の者共に對して命を

助くべしとて、寶満の城を明させ、高橋が領地悉く沒收し、豊後國規矩郡の内にて、所領を與へて置れけり。鑑種秋月種實が二男元種を養子とし、豊前香春の城に居らしむ。鑑種剃髮して宗雪と號し、後には是も香春城に住す。

鑑種沒落の後、寶満岩屋は嶮要の城郭なり。大將無くては叶ふまじと、豊後に評定ある由、高橋家譜代の士高橋越中を初め、屋山、北條、福田、伊藤、成富、萩尾等聞て、豊後府内に伺候し、城主の事を宗麟に乞ければ、吉弘左近太夫鑑理が二男彌七郎鎮堀を鑑種が嗣と定め、性名を改め、高橋主膳兵衛鎮種と號し、後剃髮して紹運と云。寶満岩屋の兩城の主として守らしめ、其邊の舊領を與へられしが、立花の城主戸次道雪と同じく二心なく、大友に隨ひ、數年籠城して、終に薩摩に降らず、節義を守りしが、天正十四年七月、薩摩秋月其外近國より大軍を集て攻ければ、紹運はげしく防戦せられしか共、小勢故防兼て、終に七月廿七日自害せられ、岩屋落城す。岩屋合戦の事は、詳に岩屋の所に記す。其後秀吉公聞給ひて、九州一の義士なりと譽給ふ。薩

摩勢既に岩屋の城を攻落し、紹運自害せられしかば、翌廿八日早旦より寶滿の城によせ来る。兼て寶滿の城の押へに置たりし有智山在陣の勢を合て三萬人を二手に分け、一は追手松尾坂より攻上る。一手は愛嶽の取出を乘破て、講堂の南の尾崎より競上る。城に籠る所の紹運の子統増家人及び筑紫が家人共、岩屋落城を親まのあたりに見て力を落しける。岩屋落城、紹運切腹の上は、寶滿の城早々渡しけれど、島津方より云遣しける。元來寶滿は筑紫と相持の事なれば、互に心和合せず、此小勢にて彼大軍に敵せん事成がたしと思ひ、統増を無事に立花へ送り届給はば、和談も仕べし。左なく候はば當城を枕とし討死すべき由答へける。薩摩の兩將の返事に相違あらじと、誓紙を以申越に付て、統増を下城せらる。然るに敵方より約束相違して、統増をば生虜とし、肥後國吉松と云所へ遣し、番を附置、紹運の妻をば筑後北の關まで遣しける。其後統増及其妻は囚となり、薩摩へ連

行、祈答院の内、麥島と云所に押籠め置けるが、翌年秀吉公薩摩へ入んとし給ひし時、島津降参せし故、立花左近將監より薩摩へ使を遣しければ、統増夫婦を免し遣しける。さる程に竈門山陣屋に火をかけられば、餘煙佛堂坊舍に燃付ける。是を防がんとする山伏數十人打殺され、其外疵を蒙る者多かりけり。岩屋寶滿の兩城既に没落しければ、秋月種實寶滿城を請取ける。

○内山太宰少貳城址

建武三年春、菊池掃部助武俊は、下座郡三城の渡にて、少貳太郎頼尙に打勝、物初めよしと悦び、頼尙が父貞經入道妙恵が籠りし有智山の館に押寄せける。

少貳宗徒の兵共をば頼尙に付て、其勢過半千年川の邊にて討れぬ。斯て又二百餘人の勢を分ちて、將軍の陣へ遣しける故、城には纔三百人にも足ざりければ、菊池が大勢に唯今攻落されぬと覺しに、城の要害堅うして切岸の下に敵を直下みさるして、防戦ふ事三日に及

べり。去れ共菊池荒手を入替へく、夜晝のさかひもなく攻ければ、城中の兵或は落失、或は寄手に降り、敵を城内に引入ければ、今は叶はじとて、少貳妙惠を始として宗徒の兵百餘人、腹搔切て失にけり。

妙惠が末子宗應藏主と云禪僧、薪を集め父が死骸を火葬し、其炎の中に飛入てこそ死にけれ。妙惠が子筑後守頼尙、相續で太宰小貳たり。應安七年三月、足利義滿菊池を討むとて筑紫に下り、太宰府に入給ふ。菊池は引退て高良山に陣取、其後暫く降参し、九州治りける。此時筑前肥前は少貳が本領なればとて、小貳頼資に賜はる。嘉吉元年赤松性具亂を起せし時、少貳嘉頼も赤松に内通しけるが、赤松亡びぬる事を聞き、其罪を謝せんとて上りしに、大内助持世を大將として少貳を追討せらるゝ由を聞き將軍に叛逆し、道より取て返し、嫡子を大將として、豊前小倉に、大内が守護代丹尾加賀守居たりしを追落しける。かくて少貳は中途に出で大内と戦はむとせしが、

急ぎ宰府に引退き、有智山の城に籠りける所に、少貳が後見の若山備中守心替りし、本城の木戸を内より閉たりしかば、少貳城に引籠る事叶はず、其後は纏貳百人許にて肥前を指て落行、生の松原邊にて菊池肥後守持武に行逢ひ合戦せしが、少貳打負危き命助り、對馬を指して行ける。筑前肥前は大内に賜りぬ。其後少貳嘉頼舊地に復せんとして、兵を擧て上松浦に至る。大内氏此由を聞、迎へ討て是を賜る。其子教頼奔て對馬に歸る。嘉頼死て其子教頼跡をつぐ。應仁元年、教頼又對馬の兵をひきゐて來り、水城の邊まで打入けるに、大友氏及大内の代官に討敗られて死す。對馬島主宗盛直も、亦從て敗没せり。文明元年の春、教頼が子筑前太郎頼忠は、對馬島主宗貞國を深く頼み、先亡の餘類共を招き集て、己が本國を覆さむとするに、山鹿、秋月、麻生、原田、草野、長野以下是に與しければ、少貳此勢を合て太宰府に押寄せ戰ひける。大内が目代新井彌四郎廣員、忽に

一戦に利を失ひて城を落しかば、少貳太郎筑前を即に打隨へける。斯て本國を取返しける。後暴逆甚しく、國人皆背しかば、大内義隆より秋月、原田、山鹿、高橋、宗像等に命じ、七千餘人少貳が城に押寄せ、一日一夜攻戰ひ、程なく少貳を追出しければ、少貳は肥前に引退き、合力の勢を待ける處に、龍造寺肥前守彼を佐賀城に捕へ置ける。かゝりし後、少貳が家亡びて、筑前肥前殘らず大内に隨ひける。

○升形城址

大石村の境内なり。愛嶽と同山別峰なり。是を愛岳に比すれば、小さく低し。此城は高橋三河守鑑種が端城なり。後には高橋紹運の端城とせられしにや、此城の後^{うしろ}大石村の上に、紹運屋敷とて其址あり。

○米山古城

由須原村と穂波郡山口村にかかり。此城は高橋紹運の取出の城なり。

○大野城址

日本紀を考ふるに、天智天皇四年、達率憶禮福留達率四比福夫を筑紫國に遣して、大野及び椽の二城を築せ給ふとあり。坂本村の北なる四天王寺山、則大野城なり。日本後紀を考ふるに、大同二年十二月甲寅朔、太宰府大野城鼓嶺において堂宇を建立して、四天王の像を安置せられし由侍れば、四王寺山は則大野城なる事明らかなり。四天王の像を建立せられしも、城中鎮守の爲として設たる成べし。續日本紀に文武天皇二年五月甲申、太宰府に令して、大野城を繕治せらるゝとあり。

○岩屋古城

宰府村の境内なり。岩屋ある故に城の名とす。此城は、高橋三河守鑑種が初て築ける城なり。鑑種は、大友宗麟の家臣一萬田左京大夫親敦が二男にて、彈正が弟なり。是より先、筑後國御原郡高橋の城主高橋三河守長種、天文の初病死す。高橋は漢高祖の末孫にて、其祖は原田、秋月、江上と兄弟なり。一男

原田、二男秋月、三男江上、四男高橋なり。其後代
代相續で、中比子無くして他姓を養子とす。長種も
子無りし故、其家臣等大友に乞て、鑑種を以て養君
とす。此時高橋も、初は筑後に居たりしが、岩屋寶
滿を取立なば名城たるべしと、筑紫越後守云けるを
聞及び、彼兩城を構へ、寶滿を居城とし、岩屋を端
城とせり。御笠郡を領し、夫より近郡を切隨へける。
宗麟より鑑種を以て筑前肥前の先手とし、警固とせ
られければ、二心なく忠を盡しける。然るに鑑種が
兄一萬田彈正が妻容色勝れたる美婦なるを、宗麟是
を得む爲、彈正を咎なきに殺せしによりて、鑑種恨
を含みける。折節永祿十年春の比より毛利大友和好
破れて、又鉢楯さじゆんに及びける。其子細を尋るに、豊前
筑前は、元大内の旗下なり。陶尾張守を毛利家より
誅伐の後は、毛利家の進止たるべき所に、大友九州
の探題職を給はりたりと稱して、右兩國の士、毛利家
に順はずして大友に隨ひければ、其遺恨とぞ聞えし。

其上先年豊前國門司合戦に毛利の兵打負て敗北せしかば、九州の士共に笑はれん事無念なりと旦暮是を憤り、いかにもして恥を雪んと謀を廻らせり。かゝりし故、毛利家より物馴たる士一兩輩、修行者の様に仕立、九州に遣し、縁を求め、便を窺ひて、味方に内通すべき國士をかたらはせける所に、高橋鑑種は本より心に怨を含み居たりければ、能時節とや思ひけん、則毛利家に心を通じ、同年六月の初より寶満を根城とし、岩屋愛嶽を端城として、兵糧をはこび入、筑紫惟門が子右馬助廣門も、此程中國に在しが、高橋謀反すると聞て、力を合せんとて本國肥前に歸り、昔の郎従を招き集て、片羽の城に立籠る。此由豊後へ聞えければ、大友宗麟大きに驚き、種々の評定に日を経て後、討手を指向らる。戸次丹後守鑑連、白杵越中守鑑速、吉弘左近大夫鑑理、數萬の勢を率して、七月七日太宰府に押寄せ、數々攻戰ふ。高橋方半合の軍に負て、岩屋愛岳の城に引籠りしを、

口杵越中守一手を以て岩屋の城を攻落す。其後鑑種
降参す。寶満の城の所に委し。宗麟より、別に高橋が家を立んと
て其人を選れしに、吉弘左近大夫鑑理が二男彌七郎
鎮理、衆に異なる器量ありければ然るべしとて、元
龜元年、高橋が家を繼ぎ、御笠郡を賜り、岩屋・寶満
兩城を守らせらる。此時廿三歳とぞ聞えし。後に法
體して紹運と號す。其後宗麟日向の軍に敗北せられ
しより、大友旗下の士背きて大亂起りしかば、紹運
寶満に籠城し、數年の間大友方に無二の忠節を盡し
ける。紹運九州にて類ひ少き弓取なり。其比岩屋、秋
月、筑紫、鼎の如くそばだち、互に向城を構へ、度々
所々にて合戦に及ぶ。依之、互に和議を調へん事を
議す。筑紫家よりは、和睦においては紹運と一味し、
豊後に屬すべき由なり。秋月よりは、豊後に一味は
叶ひがたし、此方へ同心ならば、和議を調へんと云
り。又屋山中務、岩屋城の留守居たり。此者親類共筑
紫家に多かりし故、終に筑紫と和議を調けり。依之、

紹運の子彌七郎統増を、筑紫が聟にすべきとの約諾にて、天正十四年卯月岩屋に輿入ありて、婚禮を調へける。其上家老中の子まで双方より證人に取替しけるにより、籠城もくつろぎ、家中の士漸々里下りせり。秋月には此由を聞、然らば以後種實が身において難儀出來べしとて、薩摩へ使を立・筑紫・高橋を亡すべき由申入ける。依之、島津氏の家臣島津圖書頭、伊集院右衛門大夫、兩將にて出陣し、同年七月六日、高良山に著。又主人島津義久、同兵庫頭も、肥後八代に著陣す。同月八日筑紫が城を攻落し、廣門、薩摩方の陣に降参せしかば、岩屋に軍勢を押寄ける。高橋紹運は、筑紫既に落城の上は、定て當城にも敵寄すべしとて、籠城の用意せらる。寶満の城は、高橋代々の城にて、要害尤勝れれば、彼に籠らせ給へと家臣共申ければ、紹運暫く思案して、多年此城に在て、今敵寄來るに及んで寶満に籠らば、居城を逃出たるに似たり。寶満には少々見せ勢を置、

當城に籠べしと申されければ、筑紫家臣岩屋に在し
者申けるは、廣門は島津に攻られ降参候へども、一旦
の謀にて有べし。然らば統増御事は、廣門子分にて
候間、我等主君に仕へ、寶滿の城を持可レ申と云けれ
ば、紹運聞て、統増若輩の者を指分て、寶滿に籠め
ん事いかゞなれ共、彼城に大將無くば敵に奪れなん。
然らば當城持かゝへ難しとて、息彌七郎並彌七郎妻
室、其外家中の足輕共、要害を頼に寶滿に籠られし
かば、筑紫家の一族筑紫四郎右衛門、並家臣帆足彈
正以下、寶滿の城に立籠る。去程に薩摩より來りし
兩大將、太宰府に著て、高尾山に陣す。相從ふ國士
先肥後國には宇土伯耆守行興、大津山河内守家門、
城十郎太郎、詫磨たくま長門守行重、赤星周防守、出田宮
内少輔、山鹿、川尻、合志、小代、有藤、隈部。筑
後には問注所治部少輔鑑景、蒲地兵庫頭鎮廣、三池
下總介鎮實、草野長門守鎮永、同圖書助、星野中務
大輔吉實、同民部少輔吉兼、黒木兵庫頭家實、同四

郎政實、田尻、江島。肥前國には高木右馬助、本庄伊賀守、神代^{くまじろ}、馬場、大田等相從ふ。又肥前より島津に加勢せし人々には、龍造寺政家、同家治、相良宮内少輔、有馬修理大夫、松浦刑部大輔、並原田下野守、松浦の草野中務少輔、畠三河守等は自身は出ねども、一族家人共を差越ける。寄手凡五六萬人もあると見えて夥し。岩屋の麓、つき山、横山、國分、二日市、宰府まで、尺地の隙もなく陣をとる。秋月種實、同種長は、若豊後大友より後詰の勢あらば防がん爲、岩屋には寄せず。手勢の外、筑後國の住人江上伊賀守家種、豊前の高橋^き井、長野、千手、上原等が勢まで催し集て、秋月にとまりける。同十二日、立花の城主立花左近將監統虎より、十時攝津守を使として、父紹運の方へ申遣されける。其城の儀、地の利宜しからず、寶満は要害にて候得ば、統増一所に御籠り候へ、左なくば統増共に立花へ御越候へ、一所にて防戦仕、秀吉公の御加勢を待受候

べしと有ければ、紹運十時に向て被申けるは、寶満
要害よしといへ共、地の利は人の和にしかずといへ
ば、彼城に籠りたりとも、人の心和同せずば、久敷
たもちがたかるべし。運盡すんば、當城に在共、敵
を防ぎ退くべし、運命盡なば、唐の咸陽宮に籠る共、
終に亡ふべし。とても逃れまじくば、多年の居城を
枕として死んこそ本意なれ。寶満に籠るべくば、立
花こそ増りたる要害なれば、統虎と一所にこそ籠る
べければ、安否一大事の軍に、大將數人一所に立籠
らんこと上策に非す。たとひあの大軍寄せたり共、
紹運命を限りに戦ふならば、十四五日は支へて、寄
手三千許討取ぬ事はよもあらじ、島津勢鬼神と云
共、爰にて三千の人数を討せたらば、重て立花に至
て手強き勵なりがたかるべし。又立花は名城にて、
其上勢も多し。敵攻る共、廿日の内にはよも落じ。
彼是三十日を過ざる内に、中國勢渡海すべし。然ら
ば統虎連を開かるべし。此趣を可レ申とて、十時を歸

されけり。攝津守立花に歸り、此由を申ければ、上下感じ合ける。依之、立花より岩屋の城に加勢として、吉田右京、甲斐勘解由、同名新介、後藤五兵衛、西山織部、後藤太兵衛、井手七郎左衛門、黒野源三郎、森善兵衛、黒野出雲、日高甚八郎、青木九助、原田次郎兵衛、若杉藤九郎、泉原右京、本田左馬之助、工藤彌兵衛、野村彌助、神志奈彌三郎、麻生民部、竹迫五郎兵衛、香椎甚助を先として、勇士三十餘人、岩屋の加勢に差遣す。同十四日、島津方より有智山に勢を向て寶滿城を押へ、惣勢を以て岩屋の城を十重廿重に取巻、鯨波を揚て矢合を始む。寄手は五六箇國の大軍なれば、竹把を衝寄つきよせく隙なく仕寄けり。終日終夜鐵砲の音止時なく、士卒のおめき叫ぶ聲、大地もひゞくばかりなり。火矢を射る事隙間なければ、城中の家共大略焼にけり。屏の矢狭間は、射閉られて開き得ず。城中には上下皆爰を死場と定たれば、攻口を一足も引ず。命を限りに防戦ふ。

殊に鐵砲の上手多かりければ、寄手楯に逃れ、竹把を付る者共、打殺さるゝ事夥し。され共、寄手大勢なれば、打共射れ共ひります、手負死人を引退け引退け仕寄せ付る。島津兵庫頭下知せしは、近日上方勢馳下ると聞り。夫より前に當城の敵を攻順へすば叶ふまじと云いらて、諸士を勵しける程に、切岸の下迄詰寄たり。城内には小勢なりと云へ共、籠る所は猛將勇士なれば、少しもひるむ氣色なく、屏の上に立顯れ、寄手きたなし、爰をのれと呼つて招よせ、近づく敵あれば引組みく首を取、死を恐れぬ猛卒の振廻こそいかめしけれ。同廿六日の曉に、岩屋の邑城は既に破れしかば、城中の勢、其上なる二三の丸に引籠り、猶さゝへてぞ戦ひける。此岩屋の城は、さまで峰高からずといへ共、東南の方山さかしく、屏風を立たるが如し。道嶮うして登り難く、大竹茂りて、敵に勢の程を見すかされず。北は四王寺の峯につづきて、盤石高く聳えたり。西は坂本國分寺に向

ひて、谷峰つらなれり。邑城より二三の曲輪の道を所々掘切り、搔上の上には逆茂木を曳き、高き所に石弩いしゅうをはり、城戸屏櫓堅固なり。邑城の上虚空藏の臺をば、福田民部丞 長尾左京、鬼木左馬允を初として、三十餘人にて支へたり。南の大手は、成富左衛門、辻次右衛門、中島隼人を先として、五十餘人にて堅む。西南の城戸をば屋山中務、同羽右衛門、陣三九郎、今村六郎兵衛、荒川隱岐、筑紫が家人帆足備後を始として、八十餘人にて防ぐ。風呂谷口は土岐大隅、關内記等堅む。東方水の手共に伊藤八郎、山下九兵衛、村山刑部、茂松兵部、田原連澤、赤坂運鐵、田中、小島、瀧江等六十餘人にて堅めたり。秋月方の攻口には、高橋越前、土岐龍甫、高尾、福島等、三十餘人にて防ぐ。百貫島西の山城戸をば、三原和泉入道紹心、梁瀬三河守、染但馬、馬渡良虎、轟木三助、野田左衛門大夫、市川玄蕃、中島治部、小川甚内を始として、八十餘人にて防ぐ。北の山城戸

は、弓削了意、同善右衛門、大町備前、瀬戸口一之允。二重には萩尾麟可、同大學、木村新右衛門、野上彦左衛門を初として、三十餘人にて堅めたり。甲の丸には、大將紹運、百四十五人にて守らる。各持口を破られじと、爰を先途と防戦す、わづかなる城に、籠る處の勢も小勢なれば、此大軍を以て攻落さん事は案の内なれど、城中の防強く、身方の討るゝ事多ければ、人數を多く討せんも不可然とや思ひけん、島津方より莊嚴寺と云僧を城中に使として、申入けるは、扱も此間紹運小勢を以て大軍を引受、堅固に持支へられ、猶も當城にて義死を遂られんとの御覺悟、誠に感じ入て候。去ながら、義者不仁者の爲に死せずとこそ申に、御一族とは申ながら、何とて惡逆不道ノ大友に與し給ふぞや。大友家は耶蘇宗になり、神社佛閣を破却し、古今未會有の惡行あり。故に旗下國々の諸士逐年背き、彼政道を疎み、逆心を起すと云ども、義統武運衰へて、罪を行ふ事あた

はす。斯る人の爲に、累代の家を失ひ給はむ事歎き
入候へば、是非當家へ御降参候へ、既に貴老僅の人
數を以て、五六箇國の大敵を十四五日は支へらるゝ
事、無比類手柄なれば、人いかでかさみし申べき。
立花の統虎、寶満の統増へも被仰合、三人御同心に
て、御寶子一人預り可申。左あるにおいては、各本
領毛頭相違ある間敷候。若御降参をいなと存せられ
候はゞ、八箇國の覺にて候間、紹運子息を人質に御
出し候はゞ、陣を引取候べし。其上にて豊後薩摩の
和議は、紹運御調議有べし。和議成就の時、人質を
ば返し可申由申遣しければ、紹運返事には、御懇意
に仰候處、悅入て候。乍去、紹運たとひ命を惜み、
立花統虎、並愚恩統増に、貴家と和睦の事を申入候
共、彼兩人同心の儀難計候。若同心せざる時は、紹
運面目を失ふのみならず。大友に對し、數年の忠義
空敷成候事、返すくも口惜く候。凡運命は極る期
あり。其極る時節を知すして、あなたへ隨ひ、こな

たへ隨はん事、勇士の恥る處なり。秀吉公の御助勢も、いつ着陣すべしともしらす候。如仰大友家は威を失ひ候へば、もとより當城後詰は思ひもよらす候。急ぎ城を攻られ候へ、いさぎよく打死すべしと返答せられければ、島津方力及ばずとて、和議の謀は止にけり。城中に兵糧乏しかりけるにや、立花の城より夜なく兵糧玉薬を籠にけり。暫しは知人も無りしが、寄手如何して聞たりけむ、此の兵糧を奪はむとて、薩摩勢三千餘人、切所の道に伏て、今や通ると待かけたり。是をば知らず、立花より兵糧を小荷駄數十疋に負せ、十時太左衛門・兒玉新五左衛門を警固に付て、廿六日の黄昏に、宇美河内より原山越に岩屋をさして押来る。待まうけたる薩摩勢・前後左右より起りて、閻を咄と揚てさんぐに切亂す。十時、兒玉も蒐合て、命を限りに戦けれども、敵は三千餘人、味方は九牛が一毛程の少勢なれば、さんぐに攻つめられ、小荷駄を捨て、立花へぞ歸りける。寄

手は兵糧玉薬を取持せて本陣に歸りけるが、猶も徳付んとや思ひけん、觀音寺に亂入、佛具經卷を取散し、狼籍に及ぶ。此寺は天智、天武、持統、文武、元正、五代の帝の御願寺にて、丈六の觀世音五體尊嚴に並び立し堂なれば、昔より凡人佛殿に入事を制す。依之、寺務より大將島津兵庫頭に使を立て、軍勢寺院亂入の事を訴へければ、義弘使僧に對面し、町寧に返答し、寺中に入込所の軍兵を追出し、其張本が首を切り、寺門に掛け、制法の高札を役所々々の前に立させ、觀音寺の四門には、秋月が士を番にする置れける。明れば廿七日寅の刻より、數萬の寄手竹把を、切岸の際につき寄て、夜の明るを待。既に東雲引て物の色相見えければ、ひたくと切岸にすがり、屏に上らんとするを、城中より大石を隙なく投懸け、鎗長刀にて突落し、鐵砲にて打拂ふ。取りあがれば追崩し、崩れては又攻登る。死人は切岸も埋む許になりければ、夫を踏て階とし、死生しれずに入ん

とす。卯の刻より午の終まで責合けるに、城中には替るべき勢も無し。寄手は荒手を入れ替へく攻ける程に、福田民部が持口破れて、防ぐ者共皆討れにけり。成富左衛門が持ける追手の丸に、敵續て押入んとす。成富平生名を得し勇士なり。命あらん程は、

爰より敵を一人も通すまじとて、三人張の弓を持て散々に射拂ひ、咄と突て懸るを、成富が左右に成富新五、辻次右衛門、同市之丞、中島隼人、爰を先途と戰ひけり。村山刑部が防ぎける水の手も攻め破られて、刑部以下討死す、屋山中務一手の者共も、隨分防ぎけれ共、猛勢に取籠られ大略討れて、殘る者共二重の丸に引入。三原紹心、元筑後國士三原山城守種重、嘉吉以來高橋旗下となる。萩

尾麟可、同大學、伊藤八郎、高橋越中守、土岐大隅守、弓削了意、今村、中島以下、宗徒の者共爰彼にて討死するもあり、深手を貰て腹切もあり、或は一度主君に見参して、最期の暇乞せんとて本丸に上るものあり。或は向ふ敵と引くみ差違へ、或は日比親しかり

し傍輩と互に刀を抜き差違へ、一つ枕に伏すもあり。
思ひくの最期の體哀れなりし事共なり。大將紹運
は諸口既に破れしかば、おとらぬ兵を左右に立て、
甲の丸より打出、縦横に切て廻られける間、面を向
る者なし。甲の丸と二重の丸との間は、敵の死人山
の如くに重り伏す。去れども敵は事共せず、死人を
乘越攻入けり。野村兵部が手の者並秋月が士木所民
部等、四王寺に續きたる高き峯に取上り、本丸を見下
し、諸木を切集、埋草とし、堀切を埋、闘を作て責近
づく。斯て日も既に申の刻に傾ぬ。此時生殘たる城
中の勢を見れば、僅五十人餘には過ざりけり。然も
半は手負なり。紹運是を見て、今は是迄ぞ、敵の手
にかかるじと、樓の上にあがり自害せらる。行年三
十九歳とぞ聞えし。元龜元年豊後より此城に移り、
十七年在城せり。天正六年、大友宗麟、日向の高城
にて島津と戦ひ負てより、大友の威勢衰へ、今まで
豊後に順ひたりし諸將旗下の諸將、皆大友に背く。

紹運は無二の大友の味方なるに依て、是より諸方に敵を受たれば、一日も安き心は無りけり。紹運忠義深き士にて、數年籠城し、やゝもすれば敵と戦ひ、武勇勝れて後れをとらず、終に節を守りて身を終りぬ。ためし少き忠臣なり。五十餘人の者共、城に火をかけて一度に自害す。去十三日、立花より加勢三十餘人の者も、残らず討死をぞ遂にける。惣じて岩屋の城中に籠る所の士六百餘人有けるが、一人も敵に降らず、皆戦死を遂げ、人臣の義を違へざるは、紹運平生の情深かりし故、且は其忠義に感化せし故、一人も節義を失はざる成べし。寄手の勢も・士卒都て三千餘人討れにけり。手負も千五百人餘とぞ聞えし。血は草芥をひたし、屍は山谷に満ちて、屠所の肉のごとし。誠に悲哀するに堪がたし。此時戦死せし輩の末孫、今も筑後國柳川立花氏の家人に在て、七月の魂祭には、岩屋の城の址に燈籠ひろうを燃し、無き跡を弔ふよし聞ゆ。此時紹運の軀を埋たる所とて、岩屋

の城址に塚あり。紹運の内室は、高橋越前守に介錯すべき由命せらるゝといへ共、我役所にて隙なく防ぎ戰ふ。其内に早敵に入て、其間を取切たれば、通るべき道なくて、役所にて討死す。依之、内室は囚となれり。諸士の妻子は所々に逃まよひける。斯て寶滿の城も、紹運戰死の後、翌日薩摩勢大勢押寄て攻落し、統増は虜と成れり。薩摩の兵共、寶滿、岩屋をば秋月種實に渡し、先手既に立花に押寄ける。然れ共要害よき城なれば、輒く攻落すべきとは見えざりけり。斯る所に義久の本陣より、上方より秀吉の先勢頃て下參すと聞ゆ。急ぎ其陣を引取べしと下知せられければ、八月中旬諸勢皆宰府の陣を引退く。岩屋の城には、秋月より桑野新右衛門と云士に、人數を多く差添籠置けるを、立花統虎の勢押寄けるが、其内に小野理右衛門と云者、白晝に忍び入火を懸ける故、城中騒て一矢もせず敗北せしかば、則城を乗取、立花氏の手に入ける。其後關白殿、頓て九州御下向

の由、世上風聞有し故、龍造寺より薩摩と手切の勧
とて軍勢を催し、筑後三池郡に押寄せ放火す。就レ夫、
立花統虎より龍造寺を頼み、北の關に在ける母宗雲
をうばひ取給り候へと申遣しける。依レ之、龍造寺よ
り堀江覺仙、云者を遣し、大勢を以て薩摩勢番しけ
る所に、不意に取かけ、警固の武士共を追散し、宗
雲を奪取、立花へ送り届ける。

○高尾山

宰府村に在り。薩摩勢岩屋の城を攻し時、秋月勢此
高尾山に陣取しと云。此事既に宰府の條下に記せり。

○城山

此山の事本書にものせたり。名所なり。

山口村の南に高山あり。是を城山と云。日本紀、天
智天皇四年八月に、きの椽城を築せ給ふ由記せり。城址
北の御門、南の御門とて、兩所にあり。南の御門
は、肥前國養父郡の方に在り。後には城は無く成し
にや、山上に僧坊を立たり。俗に城山千坊と云て、
僧坊多かりし故、今に至て坊中山と云。

あまが城と云、城主詳ならず。

○蘆城村古城

乙金村に在り。山上に古城址二所あり。東の城は、安河内備前と云者の居城なり。西の城は、神武修理亮居城なり。兩人共に大友に屬せり。神武は宇美の神職なりと云傳ふ。此の城は立花城の遠見城なりと云ふ。

○不動城址

牛頸村に在り。秋月旗下奈良原刑部少輔と云者、此城を築て在城せり。其後裔奈良原兵庫亮と云し者、秀吉公九州征伐の時、秋月種實が先手として討死せり。

○天判山古城

天判山の上に在り。筑紫廣門の家臣帆足備後居住せしと云。

○飯盛古城

大判山の内に在り。其上平なる所、長五十間、横十六間許あり。城主不詳。或説、筑紫廣門家臣帆足彈正城番たりしと云。凡國中に飯盛と名付し所、猶所に在り。

○柴田古城

天山村に在り。筑紫氏の端城にして、村山近江、其子彈正在城せり。是筑紫廣門の旗下なり。天正六年の秋、筑前國秋月種實其勢强大に成て、近邊なれば、先岩屋を攻め、夫より立花表へ勧んとて、肥前浪人綾部諒河守家臣には、内田善兵衛、横田讚岐守・上野四郎右衛門、木所刑部丞を先手として四千餘人、柴田河原に陣を取る。種實旗下には、長谷山民部少輔、熊江修理、芥田惣六兵衛等隨へり。其比、問注所治部少輔は、仔細有て筑後の本領を立退き、秋月に在ければ、同じく打連れ一千餘人、柴田の城に本陣を居るたり。岩屋城主高橋紹運、立花の城主戸次丹後入道道雪是を聞、軍勢を針磨に押し出し、川を隔

て矢軍を仕けるが、後には敵味方入亂れ、川中にて散々に戦ふ。岩屋方小勢なれば、終日の戦に氣たゆみて、道雪、紹運の勢、岩屋の邑城に引取んとす。種實が勢勝に乗て、先手旗下一手に成て、二日市、片野を追越して、白河まで押詰る。問注所治部少輔申けるは、案内もしらぬ敵の城下まで深入して、夜軍いかが有るべき、唯本の陣に引取、明日の一戦可然由云けれ共、種實隨はず、ひたすらかゝりける。紹運は態と敵をあくまで引受て、取籠討んとの謀なれば、

由布美作守、小野和泉守、綿貫佐三兵衛、竹迫進士兵衛、高橋越前、成富左衛門、國士薦野三河守等の勇士二千餘人の勢を添て、山陰より差廻し、思ひもよらぬ敵の後より閻を咄と揚て、爰に紛れかしこに顯れて、懸けなやましければ、秋月勢裏崩れして引退く。此勢をぬかすな者共とて、成富、綿貫眞先かけて、種實の備に切かゝる。長谷山、熊江、芥田、身命を捨て戦へども、軍兵次第に討死して、備まばら

に成行ければ、力不及して本の陣所柴田の城に引取
んとするに、二日市と針磨はりすみの間に、旗馬印數十本、
暮天の風にひらめいて、静りかつて見えにける。秋
月勢是を見て、豊後勢の打出て後詰するぞと心得て、
二日市にも入得ず、杉塚、長岡打廻り、這々夜中に夜
須郡彌長まで引取り。岩屋方に討取首三百餘なり。
秋月方の勢、豊後より後攻の旗と見しは、紹運智謀
ある大將にて、敵を近邊に陣どらせじとの計略にて、
空旗を立置れたらるとぞ聞えし。

○米かみの城址

二日市の町より東の方に城址あり。其地の田の字を
米かみと云。故に城の名とす。米かみと云城主の姓
名詳ならず。

○二日市合戦場

天正七年の四月初、筑前國秋月種實、肥前國筑紫廣
門、彌 大友に反逆しけるに、兼て内通の國士不日に
同心す。豊前國には城井、長野、千手、齊藤、上原、

筑前國には宗像、麻生、杉、原田等、皆秋月、筑紫が味方をして、兩國の内騒動す。所々に取出を構へ、大友味方の者共を一々國中を追拂ふ。筑前國立花の城主戸次道雪、同國岩屋の城主高橋紹運は無二の大友方にて、二人ながら智謀武勇の名を得たり。依之、大友父子も一向に頼み思はれける。秋月種實は九州に於て、弓箭を取て名譽を得たる者なれば、先敵を攻べしとて、卯月上旬、豊後よりの大將には大友家老志賀河内入道道魁・岩屋の城より打出づ。當國の大友方、小田邊民部大輔鎮通、大津留式部少輔鎮正、以下二千餘人を率して、秋月が出張したる石坂と云所に向ふ。斯りける所に、杉連並つらなみ、麻生元重、宗像氏貞、許斐氏備四方より起て、志賀、小田部、大津留が後をさへぎる。志賀道魁を始め、前後の敵に取籠られ、進退度を失ふ所に、高橋紹運、戸次道雪、岩屋立花よりかけ付敵を退け、道魁以下を救ければ、志賀は希有にして岩屋の城に引入、小田部、大津留も

面々居城に歸けり。同十八日、原田彈正少弼入道了
榮同國高祖の城より打出、早良郡西入部と云所に著
陣し、小田部民部大輔が安樂平あらひらの城を攻め、曲淵、鷲
が岳等にも手遣して日を送る。扱又秋月種實は志賀
道魁が杉宗像以下に追籠られて、岩屋の城に在を討
んとて御笠郡に出張し、針磨山に陣を取る。高橋紹
運此事を聞、二日市に出張して、日々迫合あり。此
軍いつはつべき共見えざりし所に、大友方の筑後勢、
夜須郡小田邊に働く由聞えければ、秋月彼と戦はん
とて、針磨山を引て夜須郡に赴しが、虛説なりけれ
ば、秋月の城に歸陣す。かゝりければ、高橋も岩屋
に引入にけり。

○博多見城址

山口村に在り。又うさきが原の城共云。村より北な
る高き山上に左り。城主詳ならず。

○和久堂城址

杉塚村の内、田端に小山あり。是則城址なり。其後

に陣の尾と云所あり。筑紫氏の家臣上野伊賀守と云者守れり。

○龍ヶ城址

吉木村に在り。此城は高橋紹運の端城にして、其家臣北原鎮久と云者住せり。此鎮久と云し者、勇あれ共智無く、唯貪欲無道の由、秋月種實傳へ聞、天正八年の比、其家臣内田善兵衛を以てかたらひけるに、近日種實太宰府に發向すべし、其方龍ヶ城に此方の人數を呼入れ置、岩屋の城の裏切せよ。左あれば紹運忽に滅ぶべし。其賞には岩屋城を可遣由云ければ、鎮久元より欲深く義なき者なれば、子細なく同心し、相圖の日を定む。紹運如何して洩聞けん、鎮久を誅せらる。其子北原進士兵衛は、此企をしらざるに依て、咎に行はれず。進士兵衛、父が不義を恥て、秋月勢をたばかり寄せん爲、秋月に使を遣し、父鎮久密謀顯れ命を失ひぬ。此憤り默止がたし、鎮久が志空敷成候事是非なく候。何の日軍勢を本堂寺村に被

差越一候へ、某手立をめぐらし、岩屋の城に夜討を可仕と申ける。種實僞とはしらず、内田彦五郎を將として、究竟の士三百人、夜討の支度に出立せて、十月十八日の暮方に龍ヶ城に着。進士兵衛會釋して酒をすくめ、爰彼處に所をさして宿し置く。秋月の勢路次に草臥、酒には酔つ前後も知らず臥たるに、夜半の比、進士兵衛手の者并近邊のはやりをの者共語らひ、秋月勢を眞中に取籠て閻を作る。秋月の兵共、夜半の比にてはあり、方角はしらず、周章騒ぬるは理りなり。内田彦五郎は、向ふ敵と引組、差違へて死す。其外の者共、或は谷へ落入、或は峰に上りて逃んとはすれ共、敵に討合て死んとする者なし。北原が兵、案内は知たり、爰かしこの切所にをり合、突伏せ切ふせする間、秋月勢三百餘人、多くは亡び、僅三十人許に討なされて、漸う夜須郡にかへりけり。